

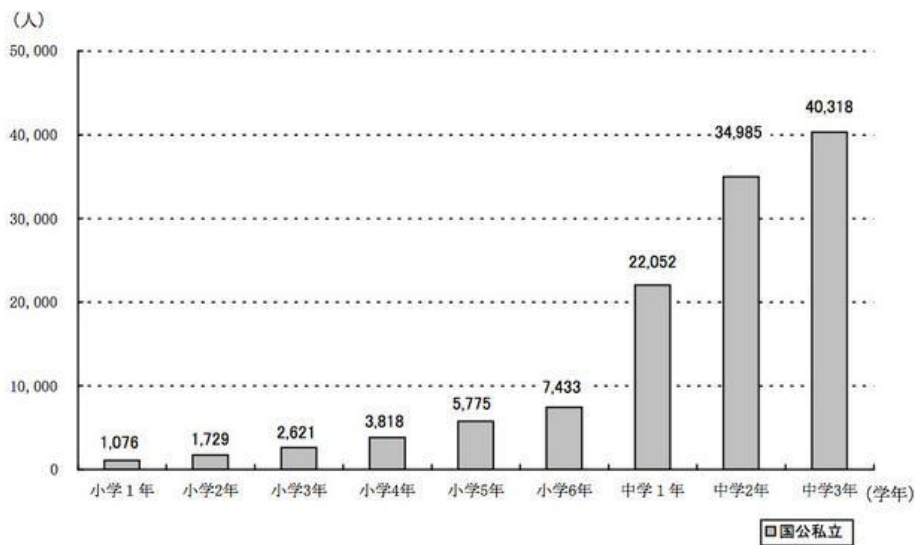
1 事業名 小学生チャレンジキャンプ

2 必要性

近年、小学校から中学校に進学したときに、環境の変化になじめず、不登校生徒が増えることが問題となっており、「中1ギャップ」と呼ばれている。

文部科学省が発表した平成22年度「児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査」によると、不登校児童生徒数は小学6年生では7,433人だが、中学1年生では22,052人となり、中学1年生が小学6年生のおよそ3倍強となっている。(※1)

※1 <参考3> 学年別不登校児童生徒数のグラフ



※2

不登校となったきっかけと考えられる状況 (複数回答可)

区分	小学校		中学校		
	人数(人)	構成比 (%)	人数(人)	構成比 (%)	
学校に係る状況	いじめ	5	0.8%	35	1.3%
	いじめを除く友人関係をめぐる問題	57	9.6%	437	16.3%
	教職員との関係をめぐる問題	13	2.2%	41	1.5%
	学業の不振	47	7.9%	248	9.3%
	進路にかかる不安	0	0.0%	25	0.9%
	クラブ活動、部活動等への不適應	2	0.3%	76	2.8%
	学校のきまり等をめぐる問題	0	0.0%	111	4.1%
	入学、転編入学、進級時の不適應	13	2.2%	78	2.9%
家庭に係る状況	家庭の生活環境の急激な変化	44	7.4%	129	4.8%
	親子関係をめぐる問題	102	17.1%	279	10.4%
	家庭内の不和	24	4.0%	120	4.5%
本人に係る状況	病気による欠席	31	5.2%	121	4.5%
	あそび・非行	1	0.2%	116	4.3%
	無気力	56	9.4%	305	11.4%
	不安など情緒的混乱	78	13.1%	235	8.8%
	意図的な拒否	9	1.5%	45	1.7%
	上記「病気による欠席」から「意図的な拒否」までのいずれにも該当しない、本人に関わる問題	39	6.5%	159	5.9%
その他	56	9.4%	68	2.5%	
不明	19	3.2%	49	1.8%	
計	596	100.0%	2,677	100.0%	

※文部科学省：平成22年度「児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査」より引用

なぜ、中学に進学した途端、不登校生徒が増えるのか。「不登校になったきっかけとして考えられる状況」の調査(※2)では、「いじめを除く友人関係をめぐる問題」を上げる児童生徒が小学校では9.6%で3番目に多い要因であったのに対し、中学校では16.3%と増加し、不登校の要因として最も多い結果となった。

近年、ゲームやインターネットの普及が、友だちとコミュニケーションをとらなくても一人で遊べる現状にあり、人間関係づくりが苦手な児童生徒が多くなっている。このことにより小学校から中学校に進学したときに、新たに出会った友だちとうまくコミュニケーションをとることができず、不登校になる生徒が多いのではないかとされている。

そこで、様々な地域から子どもたちが集まり、ともに宿泊体験や自然体験ができる当施設で中1ギャップ対策をすることが、国立青少年教育振興機構の施設として積極的に取り組むべき事業であると考えた。



SAPで少しずつ打ち解けていく参加児童

3 趣 旨

- ・初めて出会う友だちと宿泊体験をすることで、中1ギャップの解消や心身の成長をめざす。
- ・島根県立三瓶自然館の学芸員、木工館の職員など、各分野の専門家から自然について多くを学ぶ。

4 期 日

平成24年7月28日(土)～7月29日(日)

5 参加者

- (1) 募集対象 小学生5、6年生
- (2) 参加人数 27名
- (3) 参加者分析

5年生	17名	6年生	10名
男子	18名	女子	9名



「木登りって楽しいな。」

6 講師等

皆木 宏明(島根県立三瓶自然館「サヒメル」学芸課主任研究員)

竹内 幹蔵(島根県立三瓶自然館「サヒメル」天文事業室長)

三瓶こもれびの広場 木工館 職員

7 参加経費

3,940円

8 事業の内容

(1) 事業の特色

中学進学を控えた小学5、6年生を対象に、初めて出会う友だちと宿泊体験をすることで、中1ギャップの解消や心身の成長をねらう事業である。そこで当施



三瓶自然館の学芸員の説明を聞く参加児童

設のプログラムSAP(人間関係づくりトレーニング)や友だちと協力して森の中で地図を見ながらチェックポイントを見つけるオリエンテーリングをおこない、コミュニケーション能力の向上を図った。

また、当施設の周りには体験活動を行うのに適した自然があるだけでなく、三瓶の動植物について学芸員の指導が受けられる「島根県立三瓶自然館(サヒメル)」、木工細工の指導が受けられる「三瓶こもれびの広場 木工館」など充実した施設がある。そのような自然豊かな場所と学習環境がそろっている他施設と連携をとり、学びの多い自然体験活動になるように設定した。

(2) プログラムデザインと企画のポイント

中学校に進学した時、新たに出会った友だちとコミュニケーションがとれない中1ギャップの解消をめざしているため、友だち同士の参加ではなく、一人で参加をすることを条件とした。さらに、初めにSAP(人間関係トレーニング)をすることで、どのように関わっていけば友だちができるのかゲームを通して学ぶ場を設定した。

児童の自立をめざすため、当施設まで一人で電車に乗ってくるというプランも用意し、希望をとった。その際にJR大田市駅の職員や保護者と入念な打ち合わせをし、連携を取りながら安全に下車できるようにした。

自然について学んだあと、必ずノートにまとめる時間を設け、学んだことを今後に活かせるようにした。

(3) 広報のポイント

平成23年度の教育事業で参加申し込みが多かった地域を調べ、大田市、出雲市、松江市の5、6年生に広報をした。



友だちと協力して、オリエンテーリングだ！



学習した内容をまとめる参加児童

(4) 日程表

	9:30	10:00	12:30	14:00	16:30	17:10	19:30	21:00	22:00
7月28日	受付	開会式 SAP(人間関係づくりトレーニング) ～ゲームを通して仲良くなろう～	昼食 休憩	～大自然の中で昆虫の観察をしよう～ 昆虫観察 (三瓶自然館学芸員による指導)	移動	夕べのつどい 夕食	天体観察 (三瓶自然館学芸員による指導)	入浴	就寝

	6:30	9:00	12:00	13:30	16:00	16:30
7 月 29 日	起床 朝のつどい 清掃 朝食 退所点検	スペシャル オリエンテー リング (交流の家職員による指導)	昼食	～夏休みの木工作品を作ろう～ 木工体験 ・貯金箱作り ・ビー玉ころがし ・サイコロカレンダー (木工館職員による指導)	閉会式	解散

(5) 運営のポイント

①グループ活動

参加児童の人数・体調を迅速に把握するために、小グループを作り、各グループの6年生をリーダーとして、活動の前後に状況把握できるように努めた。また、保護者に児童の課題（野外活動の経験、仲間作りなど）を事前に聞き、それぞれの課題が解決できるように、グループ内の男女比、学年、課題を考慮してグループを構成した。



グループ活動の様子

②職員の関わり方

児童の自立や仲間づくりをねらいとした事業のため、職員がサポートをしすぎたり、前に出すぎたりしないように、一歩引いた状態で関わるように努めた。

同性ではなければ相談しにくいこともあるので、男性職員・女性職員が入浴、就寝など常に児童の側にいるようにした。

③保護者との連携

児童だけの参加なので、保護者も児童も不安が大きいことが考えられた。事前事後に各家庭に電話をし、内容の説明や相談、事業中の様子を伝えた。

(6) 安全管理のポイント

- ・活動場所を事前踏査し、協力施設と安全管理について共通理解を図った。
- ・事前に、保護者の方に健康調査カードを記入してもらい、緊急連絡先、血液型、アレルギー、既往症等、その他の健康面や生活面での配慮事項をうかがい、対応できるようにした。
- ・活動前にオリエンテーションを行い、参加児童に施設周辺の危険箇所や危険な動植物等について周知した。野外活動に適した服装や水分補給についても呼びかけた。
- ・オリエンテーリングでは、道を間違いやすいポイントに職員が立ち、児童に声かけをした。
- ・朝・夕のつどいやプログラムの開始時に体調の確認をし、児童の体調の把握に努めた。
- ・当施設まで一人で電車にのってくる児童が、安全に下車できるようにJR大田市駅の職員や保護者と連携をとった。
- ・就寝時も男性職員・女性職員が児童の近くに部屋をとることにより、急なトラブルにも対応できるようにした。
- ・野外活動では、無線と携帯電話の両方を携行し、複数の連絡手段を確保したほか、救急靴も携行し、事故やけがに備えた。

(7) アンケートの主な記述

- ・初めてのことばかりだったので、いろいろわかって楽しかった。
- ・自然を楽しめて、学ぶところもいっぱいあって、とてもいい活動ができたなと思いました。ぼくは朝のつどいの司会をして、良い体験ができました。友だちもたくさんできて良かったです。
- ・昆虫観察、天体観察、スペシャルオリエンテーリング、木工体験は驚くほどの楽しさがいっぱいでした。
- ・木工作品を作るのが大変だったけど、楽しかった。
昆虫観察で、虫を見つけてうれしかった。火星がきれいだった。
- ・いっぱい新しい友だちができたので、いろいろな人に話しかけられるようになりました。
- ・これに参加して、男の子や女の子の友だちがたくさんできました。それに、森の植物や生物について詳しくわかりました。森に行ったとき、また植物や生物に出会いたいです。
- ・友だちと一緒にしないとできないこともあるんだなと思いました。



「木の声が聞こえるよ！！」

9 成果と課題

<成果>

- ・事後アンケートをとった結果、27人全員から満足できるとの評価だった。
- ・自由記述や、事後のふりかえりなどでの感想も、最初は緊張したけど、最後はとても仲良くなれたという感想が多く、初めて出会う友だちと人間関係を構築するという当初の目的は達成できた。
- ・近隣施設である、三瓶自然館(サヒメル)や三瓶こもれびの広場 木工館と連携した教育事業は、今回初めての試みであるが、宿泊・食事場所の確保、専門的指導、生活指導などそれぞれの利点を活かし、協力することでより良い教育効果を生むことができた。
- ・一人で電車に乗って、当施設まで来るというチャレンジをした参加児童も8人いた。保護者から、「一人で電車に乗って帰ってきたわが子を見て、一回りたくましくなったように思えました。」という感想もいただいた。教育効果も期待できることから、交通機関と連携して事業をおこなうことも、今後続けていきたい。

<課題>

- ・文部科学省が、平成20年度に「農山漁村におけるふるさと生活体験推進校」178校を対象とした調査によると、長期間の集団宿泊体験は「人間関係・コミュニケーション能力」「自主性・自立心」「マナー・モラル・心の成長」や不登校等の問題行動にも効果が認められたことが報告された。長期間共に過ごすことにより、我慢ができなくなり、感情の衝突が起こることも考えられる。それらを解決し、友情を深める力も養うために、1泊2日ではなく、長期の宿泊体験をしていく必要がある。
- ・三瓶周辺の広いフィールドを使った事業であるため、なるべく多くの職員が関わり、危機管理をする必要がある。今回は担当職員3名で行ったが、学生ボランティア等に協力を依頼し、より安全に事業を進める必要がある。

10 普及計画・普及実績

取り組みの様子や成果について当施設ホームページで紹介する。また、教育事業等報告書を作成し、青少年教育施設、青少年教育関係機関等に送付し成果の普及を図る。

(担当 長井 理)



木工体験をする参加児童



「森の中は不思議がいっぱいだね」



寝食を共にして仲良くなりました。



笑顔のチャレンジキャンプ参加児童